

W&S「会報」・第2号の目次

- 1) *はじめに:「救いの証し:これはご聖霊のことばか?」 ...2頁~
 冒頭の星印で、各小論文や文献紹介の対象が示されています。
 *一般向き、**牧師、伝道者向き
- 2) *「見分けることについての神学」をめざして(その巻:「概観」) ...5頁~
- 3) *「聖霊論」の歴史的概観(その2):宗教改革期において ...9頁~
- 4) **歴史に見る預言現象と預言運動(その2):第二世紀:前期、中期 ...12頁~
- 5) *東海地区宣教会議:分科会「いわゆる“福音派とペンテコステ・カリスマ派”が
 ともに歩み続けるために」:レジュメ ...17頁~
- 6) 甘辛文献紹介(その2)
- *「聖霊と教会」 関川泰寛著 竹田亮一 ...22頁~
- *、**「Signs:アンデレ宣教神学院研究誌(第五号)」 渡辺睦夫 ...24頁~
- *、** *What are they Saying about Acts?* Mark Allan Powell 著
 渡辺睦夫 ...28頁~
- *、** *The Acts of Apostles* I. H. Marshall 著 渡辺睦夫 ...28頁~
- *、** *Luke-Acts and New Testament Historiography*
 Joel B. Green & Michael C. McKeever 著 渡辺睦夫 ...29頁~
- *「今日における奇蹟・いやし・預言」 高木慶太、テモテ・シスク著
 渡辺睦夫 ...31頁~
- 7) W&S「会報」・創刊号の案内...「創刊号の目次から」 ...34頁~
- 8) ワーダン・スピリットの会(Word & Spirit [略W&S])の説明とご案内 ...35頁~
- 9) ワーダン・スピリットの会(Word & Spirit [略W&S])の方針(抜粋):
 2002:1 ...36頁~
- 10) 主宰者、協力者の紹介 ...39頁~

(*) はじめに：「救いの証し：これはご聖霊のことばか？」

はじめに：

- * カナダにおりました時に、「牧師のリーダーシップ」についてのクラスを取りました。その中で、まず自分が現在牧会している教会の初代（開拓）牧師・伝道者のポートレイトを描くようにという勧めがありました。その目的は、開拓者を、その性格（伝道教会方針、奉仕期間なども）も含めて出来る限り総合的に理解し、これまでの教会の歩みにどれくらい影響を与えて来たかを明らかにすることです。とにかく、その教会の誕生の経緯や初期のあり方（特に初代牧師を中心に）は、その後続く教会とその歴史に大きな影響を与えるという事でした。
- * さてこのことは、わたしたち一人一人の信仰生涯についても言えるのではないのでしょうか。誰によって信仰に導かれたか、特に信仰生涯の初期においてどのように導かれ育てられてきたか、またその教会（母教会）の特徴は重要であると思います（教団、教派、牧師などリーダーたちのことも）。そしてもう一つ、自分が「どのように信仰決心に導かれたか」も、その後の信仰生涯に影響を与えるものではないかと思えます。つまり個人伝道で決心したのか、大きな大会で招きに応じて立ち上がったのか、それともひとりで聖書（また信仰書）を読んでいる時に決心したのかなどです。
- * 多分、私自身の信仰決心もそれなりにユニークであり、今から考えると、このような救われ方が現在の自分のあり方に否定できない影響を与えているのではないかと感じています。この二つのこと（自分の救われ方と、今の信仰のあり方）にこれほどつながりがあるとは、最近になるまで気がつかなかったし意識することもありませんでした。

救いの体験：

- * 救いの主なる神様のみ名をあげつつ私の救いの体験を証しさせていただきます。
- * 私が初めて教会（岐阜県：揖斐キリスト教会）に行きましたのは、高校2年の9月でした。その時学んでいた倫理社会のクラスで、私たちは一人一人に与えられた課題に基づいて発表することになりました。課題は、「仏教の死生観」、「仏教の世界観」、「キリスト教の愛」などいろいろあったと思います。私に与えられたのは、「キリスト教の自由」でした。早速、学校の図書館に行ってみました。しかし関連する文献を集め学び始めたのですが、難しい用語が次々に出てきて全く理解できませんでした。結局その時私が考えた最後の手は、教会に行ってみることでした。
- * ある夜、初めて教会を訪問しました。そこでスイス人の宣教師夫妻とお会いし、「キリスト教の自由」について説明を受けることが出来ました。お話を聞きながら、私は何か燃えるものを感じました。「ここには何か違うものがある！」「この人たちは、私の持っていないものを持っておられる…」それから、私は続けて教会に行くことにしたのです。
- * 教会に通うようになり、少しずつ私もクリスチャンになりたいと願うようになりました。しかしどうしたらクリスチャンになれるのか全く分かりませんでした。

そんな時、教会に行き始めてから四ヶ月後でしたが、私は不思議な体験をしたのです。ある晩のこと、布団の上に座っていると、私の心がいつもと違うことに気づきました。どのように表現していいのかわかりませんが、とにかくまるで蠟(ロウ)が溶けていくかのように、自分の心がやわらかくなっていくのを感じました。その時です。二つの「ことば(?)」が突然私の心に迫ってきた(飛び込んできた)のです。一つは、「私が大変な罪びとである」という事。それまで約四ヶ月間、教会に行って聖書のお話を聞いておりましたので、すべての人間は神様の前に罪びとであるという事はある程度分かっていました。しかしその晩は違っていました。神様が、他の人のことではなく、「この私」が大変な罪びとであることを認めるように語っておられるようでした。しばらくは抵抗していましたが、最後に認めざるを得ませんでした。「あなたが言っておられるように私は罪びとです!」...すると今度は、もう一つのことば(?)が私の心の中に飛び込んできたのです。「神様はそういう罪びとを愛しておられる!」...神様の愛についてもすでに私は知っていました。「神様は私たち全人類を愛していただきます!」しかしその夜は特別でした。神様は、全人類のことではなく、「私は罪びとです!」と認めて恐れおののいている、「この私」に関心を持っておられるようでした。こうして神様がこんな私を個人的に愛していただくことを知り、ひとりで泣きながら神様の愛を受け入れるお祈りをしました。

- * この時からすでに30年以上が経っていますが、しかし今でも、あの時の経験を忘れることが出来ません。これが私のクリスチャンとしての始まりであり、あの夜聞いた二つの語りかけ(ことば?)は、私の信仰生涯の変わることのない土台になっています。

救いの体験の影響:

- * このような「経験」は、今の私にとっても大切な出来事であり、現在の自分の信仰生活に深く影響を与えているものです。私の場合は、自分の部屋で一人になっていた時に起こりました。その時、別にクリスチャンになろうとか、どうしたらなるのだろうかと考えていたわけでもなかったと思います。しかし神様は、多くの兄姉の祈りに答えてくださり、全く予期しない時に私自身に語りかけてくださったのです。神様は語りかけて下さるお方であり、非常に個人的で親密なお方です。また、私はどこかで超自然的な出来事を期待したり、これを当然のこととして受け入れていく思いが他の人より強いのかもかもしれません。

これはご聖霊のことばか?

- * 最後に: 30年以上前に私が初めて聞いた「ことば?」は何だったのでしょうか。誰のことばだったのでしょうか。少なくとも言えることは、私たちが毎日の生活の中でいつも経験するような「ことば」ではなかったということです。では、ある種の内的印象、インプレッションのようなものだったのでしょうか。そうかもかもしれません。とにかく、それは非常に明確な出来事でした。
- * では、あの時の語りかけ(ことば?)は、「父なる神様からのものだったのか?」「御子イエス様のものか?」、それとも「ご聖霊の語りかけだったのか?」...

使徒の働きにある例をとって考えるといろいろな可能性が出てきます。9章4 - 6節にあるような「イエス様のことば」、10章4 - 6節にあるような「み使いのことば」、10章19 - 21(13:2)節にあるような「聖霊のことば」などです。私自身は長い間、ただ「神様のことば」としてしか考えてきませんでしたので、このように意識して考えたことはありません。ただもし決めなければならないとするなら、御子イエス様は天の御座で大祭司として執り成し続けていて下さるので(とすると)この地上で救いの恵みを私たち一人一人に適用する働きを担っておられるご聖霊の御声であったと考えることもできます(ローマ5:5 - 8; 1コリント2:9 - 10)・・・いずれにしても、ハレルヤ!

(*)「見分けることについて」の神学をめざして(その1): 概観

1) はじめに:

- * 「ワーダン・スピリットの会」を進めていくにあたり一つの恐れがあります。それは、二つの流れ(グループ)の間にある溝を少しでも埋めることが出来るようにという会の目的があるにもかかわらず、もう一方でいろいろ吟味したり見分けたりすることが出てきて、今ある溝をより大きくしたり、余計な誤解や問題を引き起こすかも知れないからです。どうしたらいいのでしょうか。すべての吟味や見分けること、裁くことを止めるべきでしょうか。
- * いや、時には吟味したり見分けたりすることは必要です。問題は、見分けることそのものではなく、そのあり方にあります。だれが見分けるのか。その動機はどうか。何を基準にしているのか。その方法は適切かなどです。実際に、聖書には、吟味や見分けることの重要性が教えられています。
- * 今回は第一回ですから、「見分けること」全体を簡単に概観したいと思います。そしてその次から、「見分けること」についてより詳しく取り扱っていく予定です。とにかく「見分けること」を止めるのではなく、どんな「見分け方」がふさわしいのか教えられていきたいと思います。

2) 見分けることは確かに必要である。

一般的にも必要なことです。

- * ハドン・ロビンソンは、著書の中で、ミネソタ大学エリック・クリンガー博士の研究結果を引用しています。「人は皆、一日に三百から一万七千の決断に直面する(「選択の時」訳: 岩崎由美子、179頁)」。こんなに多くの決断に直面しているのかと驚かされますが、私たちはそのような決断に際して、様々な観点から、意識的に無意識的に、吟味したり見分けたりしているといえるでしょう。確かに、結婚相手や就職先を考える時だけでなく、毎日の生活の中で「よく見分けること」はとても重要なこと、必要なことだと思います。

時代的にも必要なことです。

- * もし今が終わりの(終わりの)時代であるなら、それこそ「見分ける」ことは不可欠です。なぜなら終わりの時代の一つのしるしは「惑わし」だからです。イエスは命じておられます。「目を覚ましていなさい(マタイ24:42; 25:13)」

見分けることは聖書的である。

- * 聖書を読んでいて気づかされることは、聖書が「見分けること」を強調していることです。聖書をちょっと開いてみてください。たとえば、マタイ7:15-23「彼らを見分ける(ἐπιγνώσεσθε)」₁、1テサロニケ5:21「全てのことを見分けて(δοκιμάζετε)」₁、ヨハネ4:1「ためしなさい(δοκιμάζετε)」₁、黙示録2:2「ためして...見抜いた(ἐπίρασας•εὗρες)」など、聖書は私たちに試すこと、見分けること、吟味することなどを命じています。
- * これらのことは、確かに私たちにとって必要なことです。一人一人に与えられた

命令であると同時に、教会の重大な使命でもあります。

特に、ご聖霊の働き（聖霊運動、預言運動）に関して見分けることは必要である。

* 聖霊ご自身を吟味するものではありませんが、「聖霊運動、預言運動」はいつも吟味され続ける必要があります。確かに、歴史的に実際的にそのように言えます。真正な「聖霊の働き（運動）」を明らかにしていくためにも必要なことだと思いません。

* 聖書も、「霊」を見分けるように、「預言」を見分けるように教えています（1コリント14：29；1テサロニケ：5：21；1ヨハネ4：1-2、6）

3) 何を基準にして見分けるのか？

* 見分けることの大切さは分かりましたが、どのように見分けていったらいいのでしょうか。自分自身が「ものさし」になることはできません。

第一に、「とこしえに変わることはない」聖書こそ私たちの基準です。

* 聖書はご聖霊のことばです。ヨハネは言っています。「神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちのいうことに耳をかせません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます（1ヨハネ4：6）」。「私たちの言うこと」とは、この当時、ヨハネたちの説教や教えをさしていましたが、今の私たちにとってそれは聖書のみことばのことです。またペレヤの人々がパウロの話を熱心に聴き、「毎日聖書を調べた（使徒17：11）」ことはよく知られています。聖書のみことばは、「見分ける」時の最も大切な基準です。

第二に、主イエス様を告白しているか？

* 1ヨハネ4：1-3にありますように、イエスキリストを告白しているかどうかは重要なカギです（他に、2ヨハネ7-9）。「告白」とは、ただ口先のことではありません。そこに信仰と献身があります。ご聖霊の導きがあります（1コリント12：3）

* 何といっても、ご聖霊の働きはキリスト論的、イエスキリスト中心です。なぜなら、ご聖霊はイエス様が話されたことを思い起こさせる働きをされますし（ヨハネ14：26）イエス様についてあかしされますし（15：26）イエス様を信じない罪を明らかにされますし（16：8-9）イエス様の栄光を現されるからです（16：14）

第三に、「実」によって見分ける。

* 山上の説教においてイエス様が与えておられる基準は、「その実によって見分ける」ことです（マタイ7：15-23）。「実」ですから、時間がかかるかもしれません。かけなければならないでしょう。しかしそんな時でも、焦らずにじっくり祈りながら見分けたいのです。理性や経験、また教会の交わりも恵みですから、それらを十分に活用してともに見分けていきましょう。

4) 見分ける時に注意したいことがある。

パウロの勧めから（ピリピ1：15-18；3：2）：

* パウロの教え：異端的なものには「非常に厳しい」が（3：2、ガラテヤ1：6-10）主にある多様性に関しては「非常に寛容」です（1：15-18）同

じ人が語っているのかと驚かされるほどに、二つのケースの取り扱いとは異なっています（詳しくは、G. Fee: *Paul's Letter to the Philippians* を見よ）

- * この二つのあり方は、「見分けることについて」の神学づくりにも反映させていく必要があります。つまり「主にある多様性」を「異端的なもの」と誤解してはならないし、「異端的なもの」に対する聖書の教えをそのまま「主にある多様性」に適用することは出来ません。

聖書のバランス感覚は不思議（厳しさと愛・謙遜など）！

- * 聖書が「見分けること、吟味すること、裁くことなど」を教えているところの前後を見ますと、しばしば「愛・謙遜など」が教えられています。たとえば、1ヨハネ4：1以下；2ヨハネ4 - 11；黙示録2：4；マタイ7：1以下；1テサロニケ5：12 - 22などを挙げる事ができるでしょう。

- * 意図的に（ある種のバランス感覚によって）そのようになされているところもあると思いますが、とにかく見分ける時、私たちに愛と謙遜が求められていることは言うまでもありません。特に同じ主にある兄弟の間で（上記 参照）このことは不可欠なことだといえます。

見分け続ける必要性がある。

- * 見分けることは見分け続けることです。ですから時には十分に時間をかけなければなりません。また初め良かったので、このままずっと大丈夫だと誰もいう事は出来ません。

- * 上記の「実によって見分ける」でもふれましたように、本当に時間をかけなければならぬ場合もあるのです（高木慶太、テモテ・シスク著の「今日のおける奇蹟・いやし・預言」の第3章「いやし」の場合もそうです[甘辛文献紹介参照]）。見分ける人自身も吟味され続ける必要がある。

- * 「見分ける人自身」も吟味され続けていく必要があります。どんなに見分けるための基準が正しくても、それを用いる人自身が整えられていなければ、より健全で正しい吟味をすることはできません。そういう意味で、信仰者一人一人の自己吟味と、教会の交わりにおいてともに見分けていくことが必要になってきます（下記の「私自身の証し」もお読みください）。

5) 真理と多様性のために見分ける。

- * 「見分けていく」ということは、決して切り捨てるためだけのものではありません。真理と多様性を再発見する道でもあります。つまり、堅く立ち続けるべきみことばの真理を学ぶとともに、愛と謙遜をもってお互いの中にある受け入れ合うべき多様性を発見することでもあるのです。

6) 最後に：

見分けることは難しいが...

- * 「見分ける」ことは難しい。特に、聖霊運動、預言現象を見分けていくことは簡単なことではありません。しかし止めることは出来ません。「見分ける」ことは聖書的なことであり、現代の私たちにも必要なことであり、教会の使命でもあると思います。もし「見分けること」を受け入れないなら、それこそ聖書的でないと

言えます。

*これまで「預言すること(神学)」ばかりが強調されてきましたが、これからは「預言(聖霊運動)を吟味する神学」が求められると思います。

「見分ける」時に、さらに注目していきたい重要なポイントの例：

- * 聖書と聖霊の働きを分離していないか？
- * イエスキリストとその十字架が曖昧になっていないか？
- * 聖霊(論)の一部分だけが強調されていないか？
- * 三一論的枠組は確かであるか？

2000年2月：日本ペンテコステ親交会主催「教役者大会」に参加して：

- * 2月1 - 4日まで、遠鉄ホテル(エンパイア)でジャック・ヘイフォード師を迎えて教役者大会が開催され、私も初めて参加させていただきました。その中の一つの集会で、和解、赦しあうことの大切さが語られ、そのまま近くにいる兄弟たちと抱いて和解し合うように勧めがありました。私も、その勧めに従ってすぐに立ち上がり、周りにおられる方々一人一人と和解の祈りを始めたのです。ところが、何人目の人だったか忘れてましたが、私の目の前に現れたのは、多分その大会参加者の中で私が一番嫌だと感じていた人だったのです(実は私は、それまでその人と会ったこともなく、心の中で「あの人は嫌な奴だ!」と勝手に決めつけていただけなのですが)、一瞬躊躇しましたが目の前におられる以上逃げるわけにいきません。思い切ってその人に抱きつきお祈りをしました。祈りが終わって、彼は何も気づかないまま私から離れていかれましたが、私は自分の心が変わってしまっているのに気づきました。私の心の中の間違った感情が全く取り去られていたのです。一度も会ったことも話したこともなく(ただ写真で知っただけ)、ただ勝手に人見知りしつつ嫌な感情を持ち続けていたのですが、抱いて祈った瞬間に、それが取り去られたことは本当に驚きでしたし、教えられる経験でした。
- * 私は、これからも「見分けることについて」の神学を形成していきたいと願っていますし、また「ワーダン・スピリットの会」が健全に成長し用いられていくことを求めています。その主宰である自分自身のうちにすでにこのような問題がある(あった)のです。改めて、主のみ前にへりくだるほかありません。ぜひ、健全に見分けていくためにも、この会のふさわしい成長のためにも、祈り続けていただきたいのです。

(*)「聖霊論」の歴史的概観(その二): 宗教改革期において

3: 宗教改革(聖霊の働きを明らかにする)

宗教改革について:「聖霊の働きについての教理の発展」

* これまでにも聖霊の教理にかなりの関心を払った神学者や宗教家たちがいたことは事実であるが、聖霊の教理の発展の為に大きな貢献を果たしたと言えるのは、宗教改革者たち、特に、ルターやカルビンである。Warfieldは、「聖霊の働きに関するより発達した教理こそは、絶対的に、宗教改革のものである」と断言している。¹また、Smeatonが指摘しているように、聖霊の恵みの働きについて、Zwingli, Calvin, Beza, Zanchius, Martyr, Olivian, Ursinus, その他の人々は、ルター派教会のリーダー達と完全に一致していた。また、当時の教会のものといえるいくつかの告白や教理問答集などの間にも完全な調和があった。²

* では、中世の長期にわたる沈黙の時にもかかわらず、宗教改革期に聖霊に対する関心がどうして顕著に表れてきたのか。Nuttallは、当時の人々の関心を導いた四つの重要な要素を挙げている。それまでの教会の体制が崩壊したこと、聖書が時国母に翻訳されたこと、ルネッサンスによって人々は自分で考えるようになっていったこと、そして、個人主義の精神が、他の分野におけるのと同じように、神学においても力を持ってきたことである。³確かに、これらは見過ごしに出来ないが、更に、宗教改革における二つの重要な原理(sola fidesとsola scriptura)と不可分な要素を挙げることが出来る。つまり、第一の原理「信仰のみ」は聖霊の働きと分けることが出来ない。なぜなら、聖霊こそ福音の神の理解を示し、人間の心に働きかけて福音にふさわしい応答を引き出す働きをされるからである。また第二の原理「聖書のみ」から聖霊に対する信仰が求められる。なぜなら、トマス・アキナスは聖霊についての言及無しに啓示の概念を取扱ったけれど、⁴聖霊こそが、聖書の真の啓示者であり解釈者なのである。⁵それゆえ確かに、聖霊の教理(特に聖霊の働きについての教理)は、宗教改革の前提であるということが出来る。

ルター(1483 - 1546)

* 最初の宗教改革者であるルターは、アウグスチヌス主義の流れから出てきたと言ってもよい。⁶実際に、彼の第一の主張(信仰義認)の土台は、人間の全的墮落、神の恵みの絶対的必要であり、こうして聖霊の働きが必要になる。ルターは、「神的、また霊的な事柄において自由意志は関係がない。ただ名前だけのことである」と断言している。またエラスムスに答えて彼はこう言っている。「私はこの事に

¹ A. Kuyper, *The Work of the Holy Spirit* (Michigan: Eerdmans, 1975), in the foreword by B.B. Warfield, xxxiii.

² Smeaton, *The Holy Spirit*, 350.

³ G.F. Nuttall, *The Holy Spirit in Puritan Faith and Experience* (Oxford: Basil Blackwell, 1947), 4.

⁴ *Ibid.*, 4.

⁵ J.I. Packer, *The Holy Spirit*, produced by Regent College, audiocassette.

⁶ 彼は、アウグスチヌス派の修道士であった。

いてあなたに感謝します。なぜなら、私は、法王、煉獄や免罪といったすべて二次的な質問についてよりも、この質問（自由意志の教理）に関われることを喜んでいるからです。」⁷ 更にルターは、組織的にこれらのことを書いてはいないが、信仰者の生活に関わられる聖霊の働きについての彼の見方は、Short Catechism（第三条：聖化について）に簡潔に表わされている。⁸ここで、ルターは、イエスキリストを信じる為の私達の理解力の不足と、聖霊の働きの必要を明らかにしている。また彼は、福音によって聖霊が私達を招かれること、聖霊の賜物によって私達を照明されること、真の信仰によって私達を聖化し、保持されることを書いています。

カルビン（1509 - 64）

* 聖霊の働きについての教理が形作られるためにルターの果たした役割は大きい、それはカルビンからの贈り物であるという Warfield の言葉は事実である。⁹カルビンはこれを聖書（とアウグスチヌス）の学びから見出したと言える。Warfield は次のようにも書いている。

まさにジョン・カルビンのおかげで、聖霊の働きに関する教理が始めて形成された。また彼はこれを非常に詳しく扱い、特に「一般恩寵」「再生」「聖霊の証し」という分野でこれを発達させている。¹⁰

同じように、Alasdair I.C. Heron は、述べている。「すべての偉大な宗教改革者たちの中で、カルビンこそは、聖霊の働きについての最も組織的な探求をした人である。...知られているように、彼の綱要の第三巻において」¹¹ 確かに、私達は彼のキリスト綱要を通して聖霊（特に、聖霊の働き）についての豊かな知識を見出すことが出来る。¹²聖霊の神性、聖書に対する聖霊の証し、聖霊と聖書の一致（第一巻）人間の全的墮落と聖霊の必要、聖霊の照明と導き（第二巻） sacramentにおける聖霊の働き（第四巻）そして第三巻で、カルビンは聖霊の様々な働きを取扱っている。私たちが神様を信じる時、私たちが霊的に成長する時、私たちが祈る時の聖霊の働き、またキリストを私達に証しされる聖霊、私達をキリストに結び付ける聖霊、キリストの恵みを私たちが味わうように導かれる聖霊である。更に、聖霊は「子とする御霊、証印」であり、教師、水、火、泉として働かれるお方である。

結論

* 偉大な宗教改革者たちが強調し、更に豊かに、また明確にした聖霊の働きについての教理は信仰者の生活において決定的な原理となった。二つの重要な告白（Sola Fides と Sola Scriptura）が、プロテスタント教会の不動の原理となったように、

⁷ Smeaton, *The Holy Spirit*, 347.

⁸ Bettenson, *Documents*, 288-9.

⁹ Kuyper, *The Holy Spirit*, xxxiii.

¹⁰ *Ibid.*, xxxiv.

¹¹ Heron, *The Holy Spirit*, 102.

¹² *Calvin Institute* (McNeill, ed).

聖霊の働きに関するこの教理は、少なくとも福音派にとって重大な原理となったのである。しかしこの偉大な遺産はしばしば今日でも見過ごされてしまう問題がある。

(**) 歴史にみる預言現象と預言運動 (その2): 第二世紀前期、中期

3) 第二世紀における預言現象

第二世紀はこの論文において最も重大な時代の一つと言えるかもしれない。教父達がその前の時代から受け継いだ恵み（特に、聖霊の賜物）をどのように理解し、経験し、文章化したかに注目することが出来る。Marcion (-160)やその従者たちを初めとして、教会が受け継いだものに対する様々な異説や異端が次々に現われてきた。そのような中で、教会は自分たちの教えや経験を確認したり、明確化したりする働きを担うようになっていった。したがって教会文書の数は、前の時代に比べるとかなり増加していると見てよいらろう。しかしながら B.B. Warfield は、奇蹟のわざに関する証拠に関して次のように書いている。「使徒後の教会の初めの50年の間、奇蹟のわざに関する証拠はほとんどない。またその後の50年もその証拠はわずかで重要でない。しかし次の世紀(第三世紀)になると、非常に沢山の証拠が見られる」¹³ Warfield によれば、奇蹟のわざ（奇跡的な聖霊の賜物も）に関する重要な証拠は第二世紀にはほとんどないことになる。しかし彼の言っていることは正しいと言えるだろうか。

第二世紀初めの文学的資料として、まず、アンテオケの監督であった Ignatius の手紙をあげることが出来る。彼の七つの手紙のうち、特に、四つが私達の学びに関連している (Letter to the Ephesians; Letter to the Smyrnaeans; Letter to the Philadelphia; Letter to Polycarp)。

* これらの手紙はアンテオケからローマ（殉教地）に向かう間にイグナチウス（c.35-）によって書かれたと思われる。また、これらは当時非常に影響力のあった監督による生き生きとした手紙であり、その内容から当時の人々の霊的な生活を想像することが出来るだろう。

* まず、次の三つの箇所（Polycarp（ポリュカーブ）への手紙：17章；スミルナ人への手紙：前書き；エペソ人への手紙：17章）から、当時、御霊の賜物が存在していたことを確認し、またそれについてのイグナチウスの見解を知ることが出来るだろう。第一に、イグナチウスとその手紙の読者たちは御霊の賜物を受け、それを経験していたのである。確かにスミルナの教会は、あらゆる種類の御霊の賜物を与えられていたと思われる。またスミルナの監督であったポリカーブは、すべての賜物に富むことが出来たとも言っている。第二に、イグナチウスはその手紙の読者たちに彼らの奉仕において賜物の重要性と必要性を明らかにしている。そういう意味で、彼は教会内外において御霊の賜物が無視されつつある問題に気づいていたのかもしれない。

* 更に、フィラデルフィア人への手紙（7章）にある興味深い言葉から、イグナチウスが他の信者たちに与えられていた御霊の賜物の事実を強調していたこと、また彼自身も預言の賜物を受け行使していたことなどを知ることが出来る。彼は次のように書いている。「というのは、私があなたがたの所にいた時、大きな声で叫び語りました。『その監督、その長老や執事たちに心を留めなさい』しかし、あなたがたのうちのある者たちが引き起こした分裂を前もって知っていたので、この

¹³ *Counterfeit Miracles* (Edinburgh: The Banner of Truth Trust, 1986), 10

ように私が言ったことをもしあなたがたが疑うなら、彼（神）が私の証人です。私はこの方のゆえに、今、囚われの身になっています。私はこの事について誰の口からも何も聞いていません。ただ、御霊が私にこのように語られたのです。『その監督無しに何もしてはならない』と。」¹⁴

- * 第二世紀初めにおいて、私たちが手にすることの出来る文献は限られている。しかしその中において、イグナチウスの手紙は今の私達の学びにとって非常に価値のあるものとなっている。特にこの時、彼がアンテオケの有力な監督であったこと、そしてこれらの手紙は個人的なものであるが監督として権威をもって記されていることなどを考慮する時、彼の賜物についての経験と理解をより小さな地理的領域の中だけに閉じ込めておくことは出来ないように思われる。おそらく、このような理解と経験は、アンテオケからローマに至るより大きな領域の中で受け入れられていたものと考えてよいのではないか。

二世紀中頃に書かれた二つの書は私達の学びにおいて重要である：それは *The Shepherd* 又は *The Shepherd of Hermas* と *Dialogue with Trypho* (Justin Martyr [ca. 100-165]) である。

- * この時期において、Ronald Kydd が適切に説明しているように、キリスト教界において新しい傾向が表れてきたといえる。「クリスチャン達は自分たちが信じてきたことを正しく表現する為の論理的な体系づくりを試みていた。こうして、最終的にキリスト教信仰となる教理を説明し、弁護し、教える人々の数が増えていった。」¹⁵

- * 護教家 Justin Martyr は、回心後、他の哲学や宗教との対話の中で、これまでの教えと経験というキリスト教的遺産の神学化の試みを始めた。彼の書の一つである *Dialogue with Trypho* において、「Trypho」という名前のユダヤ人に対してメシヤであるイエスキリストについて語り、彼の宗教の誤りを指摘してる。

- * この書（特に、39、82、87、88章）において、Justin はイエスキリストを信じる者たちの間にある賜物の存在を強調し、次のように、Trypho に書いている。「毎日、（あなたがたの内の）ある者たちは、間違った道から離れイエスキリストの弟子になっている。また彼らは一人一人が価値があり、このキリストの御名によって照らされて賜物をいただいている（39章）」¹⁶ また彼は82章においても、「現在でも、私達のもとに預言の賜物がとどまっている。だから、あなたがたの民の間に以前与えられていた賜物が私達に移された事をあなたがたは理解すべきである。」と語っている。¹⁷ 更に Justin は、88章でも「今、私達の間で、神の御霊の賜物をいただいている男女を見ることが出来る。」と繰り返している。

¹⁸

- * さらに私達は、Justin の賜物についての理解が健全であることを知ることが出来

¹⁴ Ignatius, *Letter to the Philadelphia* 7, ANF, 1:83.

¹⁵ *Charismatic Gifts*, 22.

¹⁶ *Dialogue with Trypho*, 39, ANF, 1:214.

¹⁷ *Ibid.*, 82, ANF, 1:240

¹⁸ *Ibid.*, 87, ANF, 1:243.

る。彼の理解をまとめると次のようになる。第一に、クリスチャンの間の賜物の存在は、詩篇68:19(18)¹⁹とヨエル2:28以下の成就である。第二に、賜物の現在の経験はイエス様の約束と関連している(昇天後に与えると言っておられた)。第三に、天のみ座におられるキリストは、一人一人にふさわしい御霊の賜物を授けられる。²⁰第四に、以前、賜物はユダヤの民に与えられていたが、それらは今キリスト者に移されている。第五に、彼はイザヤ書11章2節に従って、賜物のいくつかを列挙している(39章)。Justinの賜物のリストには、預言の賜物は入っていない。しかし、この事は彼が賜物の一つとして預言を除いたと言うことではない。この39章において、彼はユダヤ人たちに反論するためにイザヤ書の御言葉に従ったにすぎない。²¹実際に、彼は他の箇所でも預言の賜物を強調している(72、87章)。

* Victor Budgen は次のように書いている。「Justinの賜物についての言及は、驚くばかりにわずかである(tantalizingly brief)。彼は確かに書いているが、...それ以上詳しくは説明していない。しかもこれまでの言及も、この後の言及もすべて新約時代の出来事のことを言っているのである。」²²しかし、Budgenの主張は適切であるといえるか。Justinの言及は、すべて新約時代の賜物のことなのか?先に記したように、Justinのこの護教的論文において、彼が最も強調したいことの一つは、賜物の現存である。またBudgenのこの表現「驚くばかりにわずか」は、ふさわしいとは言えない。彼は、Justinの本を「賜物の書」として用いることを期待しているかもしれないが、これは一人のユダヤ人ラビとの護教的対話の書である。またWarfieldのJustinに対する取扱いも不十分であると言わなければならない。²³実際にWarfieldがその書においてしていることは、Justinの作品には賜物の実例がないという監督John Kayeの言葉を引用するだけである。確かに、Justinは、Tryphoとの対話において、賜物の実例を挙げていないが、Tryphoに対する弁明においてそれが本当に必要であったのか。ただJustinは、その代わりに、彼自身の経験と確信を明らかにしているのである。

* 最後に、彼の回心後の歩み(特に、ローマでクリスチャンスクールを開いていることなどから)を考える時に、²⁴Justinの賜物についての理解と経験は、彼自身のものというだけではなく、ローマや、多分、エペソ、そして、更により大きな領域におけるクリスチャンたちのものでもあったと言えるのではないか。

* もう一つの書である *The Shepherd* 又は *The Shepherd of Hermas* は、おそらく第二世紀中頃の作品と思われる。²⁵著者はなお決定的ではないが、²⁶この書が第二

¹⁹ エペソ書4:8をみよ。

²⁰ Ibid., 87, ANF, 1:243.

²¹ Harold Hunter は Justin の賜物のリストについてより詳しい分析を行っている。"Tongues Speech: A Patristic Analysis," *Journal of the Evangelical Theological Society* 23 (June 1980): 127-8.

²² *The Charismatics* 115.

²³ *Miracles* 11.

²⁴ *Cross of the Christian Church*, 770頁を見よ。

²⁵ 執筆時期は明確ではないが、Lightfoot が述べているように第二世紀中頃(又は、初期)と思われる。Lightfoot は

世紀後半の諸教会に対して大きな影響を与えていたことは知られている。²⁷それ故に、この書を通して得られる事柄は、私達の学びに関しても非常に重要なものといえる。

* Didache において見たように、*The Shepherd* の「第 11 の命令 (The 11th Commandment)」は、真の、または偽の巡回預言者の存在と活動が描かれている。第一に、著者は偽りの預言者のいくつかの特徴を説明し、人間的な願いによって動かされるのではなく、あくまで本物の預言者は、神の御霊の力によって導かれることを強調している。また真の預言者と偽りの預言者をどのように見分けるか (δοκιμασις) を示している。預言者を見分ける方法は、マタイ 7 章 15 - 20 節にあるイエスキリストの言葉と Didache の勧めに関連している。「神の御霊を持っている人をその生活によって見分けなさい。」こうして彼は、神の御霊にある生活のいくつかの特徴を列挙している。真の預言者は、「従順、温和、謙遜であり、この世のすべて邪悪さと空しい欲望を避け、他の人々のそれらよりも、より少ない必要で満足する者」である。また著者は、真の預言者というものは、神が彼に語るように望まれる時だけ語るものであることを強調し、²⁸真の預言者が教会の集まりに来た時、神様の御心に従ってそこで信者たちのためにどのように預言を始めていくのがふさわしいか描写している。それから著者は、真の預言者の場合と同じように、偽預言者たちのいくつかの特徴を挙げている。最後に、真の力強い御霊が、ご自身と力のないこの世の霊たちがどれほど異なるか示してくださいるので、真のみ霊に信頼するように勧めている。²⁹

* この書 (第 11 の命令) から、私達は真と偽りの巡回預言者達の存在と活動の実際的な姿を見出すことが出来る。確かに新約聖書の時代においてすでに存在していた真と偽りの預言者たちの流れが、第二世紀中頃においても存在していたことを否定することは出来ないだろう。またもし本書の著者が、Pope Pious I の兄弟、ローマの Hermas であるとするなら、この所で扱われていた預言運動が、より広

次のように書いている。「(この作品は) 二世紀の中頃直後に東方、西方教会全体的に広まっていたことが分かる。」例えば「これは Gaul の Irenaeus、アフリカの Tertullian、Alexandria の Clement、Origen によって引用されている。」とある。更に *Apostolic Fathers*, 161-2 を見よ。

²⁶ 執筆者に関していくつかの可能性があるが、その中でも Pope Pius 1 の兄弟 Hermas によって、ローマで書かれたとされるのが有力である (Ibid., 161-2)。

²⁷ Irenaeus は この作品をほとんど正典の一つとみなしているようである (*Against Heresies* 4:20,2, ANF; 1:488)。また Clement of Alexandria (*Stromata* 2:1, ANF; 2:348; 2:9, ANF; 2:357; 2:12, ANF; 2:360; 4:10, ANF; 2:422; 6:6, ANF; 2:491; 6:15, ANF; 2:510)、また Tertullian の *On Modesty* 10 章 ANF; 4:85 を参照せよ。

²⁸ この事はパウロの言葉 (例えば 1 コリント 14:30) を実際的に説明していると言えるかもしれない。ただし、1 コリント 14:32 (この箇所は正確な意味を明らかにすることは難しいが) が示すように、著者は、預言者自身にではなく神の側の導きに強調を置きすぎているからである。更にこの点について、J. Reiling, *Herms and Christian Prophecy* (Reiden: Brill, 1973) (12-14 頁) を見よ。

²⁹ この内容についてのより詳しい分析については Aune の *Prophecy* (226-228 頁) と Reiling の *Herms* (27-57 頁) を見よ。

範な領域で起こっていたといえるだろう。最後にこの書は、預言の賜物やそれぞれの教会に属する預言者について何も語っていないので、決定的なことを言う事は出来ないが、当時、巡回預言者の働きが活発であったと見られる以上、それぞれの教会レベルでも同じような働きが続いていたと仮定することは可能であると思われる。この H. B. Swete の言葉は受け入れられる。「これは第二世紀のおそらく 40 又は 50 年代までローマ教会において預言が残っていたことを示す注目すべき証言である。」³⁰

* . . . (第二世紀後半に続く : Irenaeus とモンタニズムについて扱う予定)

³⁰ *The Holy Spirit in the Ancient Church*, (London: Macmillan, 1912), 25.

東海宣教会議 IV：分科会レジュメ：2001：11：5 - 7

(*このレジュメは、分科会の参加者にお配りしたものでほとんど訂正しておりません。ご了承下さい。)

I：分科会 1：いわゆる“福音派とペンテコステ・カリスマ派”がともに歩み続けるために：
渡辺睦夫

1) 初めに：

「棲み分け」でいいのか。

- * 「生活様式の似た二種類以上の生物が、生活の場を空間的・時間的に分け合う現象(岩波辞典)」
- * 1996年に日本リバイバル同盟が発足した頃には、日本の福音派はこれからどうなっていくのかという危機感のようなものがあった。しかし今、閉塞感とともに、ある種の「棲み分け」状態が出来つつあるように思われる。これでいいのか、このままでいいのか。

2) とともに歩み続ける必要がある。

「よりよい関係(交わり)を求めることは聖書的なことである」

* これまでにあった問題、今ある問題から始めるのではなく、まず「聖書の教え」から始めたい。

- * 聖書は、異端や異端的な教えに対しては注意深く吟味しそこにある問題を「裁く」ことを教えているが、クリスチャンの交わりにおいては互いの違いや多様性を超えて一致と調和を求めていく(進めていく)ことを教えている(マタイ7：15 - 20；1ヨハネ4：1 - 3；ヨハネ17：21 - 23；ピリピ2：1 - 4)。
- * 私たちはすでに御霊の交わりに与っている(経験している)ので、あらゆる努力を通してこの霊的な現実を今の自分たちの教会生活の中に具現していく必要がある(特に、エペソ4：1 - 6；ピリピ2：1 - 4；1コリント12：13)。
- * 私たちは、さらに終末的な一致の完成に与ることになっている(たとえば、エペソ2：18 - 22，4：13)。したがって、私たちはそのような確かな終末的希望を覚えて一致に進むことが出来る。これを導き助けてくださるのは聖霊である。
- * 様々な形やレベルにおける問題や亀裂があるにもかかわらず、その中で多様性を認めつつ実際の一致を求めていくことは、今の私たちの福音宣教や教会生活にとって有益であり必要なことである(ヨハネ17：11，20 - 23)。

「よりよい関係(交わり)を求めることは福音派の歴史的特徴の一つである。」

- * 歴史的に、私たち福音派(広い意味で)は様々な分裂・分派、分離主義を避け、真の一致に多様性が必要であることを認めながら、より広い聖書的なエキュメニズムを強調してきた(このため分派的根本主義とともに歩むことが難しくなった)。
- * これまで私たちは、一致を強調しつつも、同時に聖書の重要な教えに堅く立つことを求めてきたので、自由主義的エキュメニズムには賛同することが出来なかった。
- * ペンテコステ・カリスマ派に関して、たとえばNAEは、様々な違いにもかかわらず、歴史的によりよき交わりを確立してきたといえる。またJEAについて言うなら十分であると言えないかもしれないが(ある立場から見ると)、1998年以

降アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の加盟を承認し、ともに歩み続けていることは注目できることではないか。今後は、JEAにおける「カリスマ条項」の取り扱いが注目される。

3) お互いの相違を知る必要がある(お互いの違いを分かち合い理解し合うことも必要である)

どうしてお互いの相違を知る必要があるか。

- * 一般的に考えても：
 - *たとえば、結婚カウンセリングの中で両者の違い(背景、経験の違い)を分かち合うことは有益である。
- * 福音派(広い意味で)は、信じている内容を曖昧にしたままの自由主義的エキュメニズムに反対してきた。やはり、福音派として真に(まじめに、親密に)交わっていくためにも互いの違い(特に信じている内容の違い)を知り合うことは必要である。
- * 異端に対しては吟味したり裁いたりするのに、クリスチャンの交わりにおいてそれをしないのか。それはすべて、交わりを壊すことになるのか。積極的な意味はないのか。
 - *クリスチャンの自己吟味の必要性
 - *エホバの証人もある種の「聖書信仰」を主張している。吟味の必要あり。
 - *クリスチャンといっても、私たちのすべての教え、理解が正しいということではない。
 - *行き過ぎているところ、間違ったところがあるから、謙遜に弱さを認め合い聖書に基づいて吟味しあうことも必要である(ローマ15:14、1テサロニケ5:21))
 - *これは裁き切り捨てるためのものではない。交わりのための吟味である(釈義さえも切り捨てるためのものではない)
 - *互いの違いを分かち合い、吟味しあうことによって得られる益も大きい。
 - *知り合うことの中に、お互いの歴史、特徴、強調点、み言葉の読み方(釈義、解釈、適用)などにおける共通点と相違を分かち合うことが含まれる。
 - *またペンテコステ・カリスマ派と一口に言っても多種多様であり分かりにくい。そういう意味でも、互いに知り合うことは必要なことではないか。

相違の例：ペンテコステ派、カリスマ派、第三の波、福音派(狭い意味で。ただしその背後に様々な神学、歴史、伝統がある)

- * 異言：*Must[聖霊のバプテスマのしるし、唯一の最初のしるし]、祝福の入り口として推奨する、様々な聖霊の超自然的賜物の一つ。異言以外にも「霊的祝福」の鍵はある。
 - *分からない。すでに1世紀末までに廃れた。聖霊の賜物の一つとしてありうる。
- * 超自然的賜物： *今も2000年前も変わらず現存する。コリント書などにある賜物のリストのみ(1コリント12:8-11)を強調する。それらの賜物も他の多くの賜物の一つと考える。五役者の務め(エペソ4:11)を強調し、またそれらの現存または現存的回復を信じる。いやしの強調、預言(個人預言)の強調、その他。
 - *分からない。今でもありうるし体験している(特に、祈りの答えとして)。すでに超自

然的賜物はすべて終わった。あるのは自然的賜物である。出来事としての奇蹟は今もあるが、啓示的な賜物は終わった。

- * 使徒の働きを読み方 *特に、2章のペンテコステの出来事とその経験（聖霊のバプテスマ：類似した出来事として、8章、10章、19章）は、すべてのクリスチャンに必要な規範を示している。使徒の働きにある状況全体が「神の国」を描写しており、それは現在でも求められ回復されるべきあり方である。
 - *実際にあったことをただ描写しているものであり、使徒の働きで起こったことが全時代的に起こらねばならないという意図は無い。使徒の働きはイエス様時代（イエス様の誕生から復活まで）が終わり、次の新しい時代（聖霊の時代、宣教の時代、教会の時代）が来たことを明らかにしている（救済史的にみる）8章、10章、19章の類似出来事は、その地理的（民族、文化的、社会的立場）拡大を表しているかもしれないし、そこにルカの神学的意図があるのかもしれない。また実際に起こったことをただ描写しているのかもしれない（このような経験は他にも沢山あったのかもしれないし、実際に、8章、10章、19章だけだったのかも）
- * 五役者の務め *特に、五役者の中でも預言者、使徒の務めを強調し、それらが回復することを求める（または、すでに回復したことを認める）。これらよりも、超自然の賜物の方を強調する。
 - *他の超自然の賜物の現存を認める場合でも、預言者や使徒の回復までは考えない（言葉の定義にもよるが）
- * 聖書の読み方 *どちらかという、聖書を文字通りに「のみ」読む傾向がある。したがって、その背景や文脈、神学が軽視される。聖書の二重性のうち的一方（前者）だけを見る（神のことはであり、人の言葉である）こうして聖書の理解を誤る可能性。
 - *聖書の二重性の後者の方を強調しすぎてしまうかもしれない。こうして神様からの語りかけを聞くというあり方が弱くなってしまふ（学びだけで終わる）
- * 礼拝式・賛美の仕方 *賛美を中心に、感情面での応答をより強調している。またそれぞれの賜物を用いること、礼拝式への意識的積極的な参加が見られる。いつも受身ではない。形式的ではなくもっと自由な雰囲気を作る。ただし自由な雰囲気イコール聖霊の働きか。
 - *賛美を中心に自由な雰囲気を大切にしたい礼拝。伝統的で整然とした静かな礼拝式を強調。み言葉、説教を中心とする。じっくりと教えられていくことを求める。プログラムに従って進行していく。形式化、形骸化してしまふ？

II：分科会2

1) お互いの共通点を確認し分かち合う。

両派は共に御霊の一致に与ってきていることを再確認する必要がある。神様の御心（パウロの心でもある）は、私たちが「御霊の一致を保つためにあらゆる努力をすること」である（エペソ4：1-3）またこの一致は、日本の伝道においても必要なことであり、意味のあることである（ヨハネ17：20-23）

両派は共に聖書を私たちの信仰と生活すべてのための唯一絶対の規範として受け入れ、それに基づく無数の聖書的、神学的真理と恵み、また様々な歴史的財産と伝統を共有していることを確認する必要がある：

- * 例：使徒信条、ニケア・コンスタンチノーブル信条、他（JEA、NRAの信仰告白比較）
- * 特に、両派は、聖書が自分たちにとって、また互いの交わりにとって、唯一の権威ある基盤であることを再確認する必要がある。また、聖書のみことばと聖霊（のお働き）は対立的ではなく、聖書こそ“聖霊のおことば”である。聖霊のお働きと健全な聖書解釈は分けることができない。

両派は福音派（広い意味で）の特徴を持っている。

- * 例：(Donald K. McKim) 伝道と信仰による神との個人的な交わりを強調；
(McGrath) 聖書の最高權威性、キリストの尊嚴性、聖靈の主權性、個人的回心の必要性、キリスト者共同体の重要性

2) とともに歩み続けるためにどうしたらいいのか、何ができるのか、どういうことに注意すべきかなど、具体的な提案をする。

福音派(狭い意味)は、聖霊派とどのように関わっていくことができるか(三つの立場)?

- * 第一：交わりのための実際的な手立てを考えることなく今のままの状態で行く立場。しかしながら、可能なすべての努力をしないことは真の問題解決にはならないのではないか。もしあるとしても、それはただ暫定的なものでなければならない。
- * 第二：分離をさらに明確にしていく立場。確かにこのような立場は、これまで経験してきた難しい問題や、他の教会、またクリスチャンたちへの影響を考える時理解できないわけではない。また分離することによって、様々な霊的運動をさらに注意深く見分けていくことが出来るようになるかもしれない。しかしこの立場もまた、暫定的なものであるべきである。二つの陣営があるとして、それを明確に、現実的に、分離することが出来るだろうか。今日、多くの信徒たちは、書籍、テープ、集会、インターネットなどを通して、様々な情報を自由に手にすることが出来る状況にある。
- * 第三：一番よい方法が見つかったわけではないが、「more open but more cautious」のあり方で、聖霊派との関係(交わり)をさらに考え祈りもとめていく立場。また、両者の間にすでにある様々な問題に対しても、その問題を認めながら、積極的に神学的、實際的解決(完全で最終的な解決ではなくても)を求めていく必要がある。

實際的な解決に向かっての根本的なあり方を再確認する(福音派として):

- * 私たちにいつも求められることは「兄弟愛」である。私たちは同じ主にある兄弟姉妹であるから。そしてオープンであること、また謙遜をもってよき交わりを築いていくことやお互いから学ぼうとする心は不可欠である
- * 私たちは、聖書に基づいて(エペソ4：1-3) お互いに御霊の一致に与ってきていることを再確認する必要がある(上記のとおり)。
- * 私たちは、自分たちが今、無数の聖書的、神学的真理と恵みを共有していることを確認する必要がある(上記のとおり)。
- * 真の交わりを求めていく(深めていく)ためにも、私たちは互いの間にある神学的問題や相違を、愛を持って分かち合い論じていく必要がある。この場合は、お互いの相違を認識することを恐れる必要は無い。互いに真に知り合う(類似点や相違も)ことなしに、どのようにして真の現実的な交わりを形成することが出来るか。Dinoia が言っているように、「違いを認識することは、不一致を促進することと同じではない。これは他の人々をまじめに見ているあり方である。」
- * (に関連して)私たちは、互いの特徴や強調点に関して、もっと率直に、健全に、論じ合ったり、裁いたり裁かれたりする自由が求められるだろう。これは必要なことであり聖書的でもある。そうでなければ、私たちは孤立的で自己満足の罠に陥ってしまうだろう。すでに御霊の一致が与えられているのであるからそれぞれの立場を過度に弁護する必要は無い。逆に、神学的により健全に裁き裁かれるためにも、健全な釈義や解釈を強調しなければならないだろう。
- * 私たちは、聖書が自分たちにとって、また互いの交わりにとって、唯一の權威

ある基盤であることを再確認する必要がある（上記のとおり）

いくつかの実際の出発点

- * 私たちは、自分たちが最近経験し考えている事柄を、もう一度聖書に基づいて神学化する必要がある（J.I.パッカー）。
- * 同時に、それぞれの伝統的な神学を、自分たちの経験に照らし合わせて吟味する必要もある。なぜなら釈義も解釈学も神学も最終的なものではないからである。
- * 私たちは、もしある出来事、現象、経験などが聖書にはっきりとされるされていないならば、これらのものは聖書には無いことを勇気をもって明らかにする必要がある。実際に起こったのなら、出来る限り私たちは神学化することを求めていく必要があるが、「こじつけの解釈」は避けなければならない。
- * さらに実際的なこととして、私たちが交わりを深めていこうとする時、おそらく、リーダーたちから個人的なレベルでの交わりを始めるのがよりよいと思われる。個人的な交わりがある程度まで進んできたところで、全体的に、公的に、私たちは交わりを持っていくことが出来るかもしれない。
- * 両派に属する牧師たち、伝道者たちは、現在実際にかかわっている「超教派的集会」などにおける様々な機会を利用することが出来る。両者が共に参加できるような集会は少なくなってきたが、まだいくつかはある。たとえば、日本福音主義神学会や日本伝道者協力会など。
- * 私たちは、お互いの交わりを作り上げまた前進させるために実際的で暫定的なルールを作ることも出来るだろう。たとえば、A.B.Simpson（1843 - 1919）が、異言（現象）に対してどうあるべきかに関して、かつて提案した有名なことは「Seek Not, Forbid Not」もある。このやり方が、今の日本に適用可能かどうかはともかく、私たちは相互交わりのために実際的なルールを暫定的に考えることが出来る。ドイツでは、日本と同じような問題が起こる中で、福音的な教会が最近起こっている霊的運動との適切な交わり（かかわり）を保つために様々な努力を払ってきているといえるだろう。そのような中で、たとえば、Peter Strauchは、次のような実際的で有益な知恵を提示している。 教理的な立場そのものよりも、実際の生活にかかわる形や現象における相違や溝を軽視してはいけない。
またペンテコステ・カリスマ派は、そうではないグループとかわる時に、彼らが自分たちの信仰や生き方に加わることを求める傾向がある。したがって、ともに何か活動をする時、その前にいくつかのルールや方針を作る必要がある。そうでなければ、いつまでたってもよい交わりを形成することは出来ない。これまでの経験から多くの教会やクリスチャンたちがカリスマ運動などのかかわりの中で問題や苦しみを経験していることは確かである。したがって、牧会的な理由によって、カリスマ派とともに歩まないことを決定することも出来るということである（引用）。ただし、このような分離の牧会的決定は暫定的であるべきだと思われる。
- * 私たちは、ともに互いの交わりのための愛の祈りと、互いの神学と経験を見分けていくための健全な釈義と解釈を必要としている。私たちは、共にヨハネ17章にある「主イエス様ご自身の祈り」に耳を傾け、この祈りに応答したい（特に、11節）。

甘辛文献紹介(その2): 2002: 1

(*) 関川泰寛著 『聖霊と教会』 教文館、2001年、259頁、2500円

この本を最初に手にしたとき、題名と副題名を見て大きな期待感を覚えた。「はじめに」の中でも著者は、今日、日本の(実は世界中の)教会が直面するいくつかのかなり重要な問題を上げ、それらのことについて具体的で、しかも実際の答えを期待させている。本書は日本のプロテスタント主流派教会の観点から書かれているのだが、その主流派の現状を率直に把握し、すでに述べたようにそれに対して具体的で実際の解決を冒頭において期待させる。

日本独特の土壌の中で生まれ育った諸霊に関しての日本人の観念と理解について書かれた第1章はそれらを整理するのに役立つ、しかも面白い。私が副牧師をしていた神奈川県のある教会での経験を思い出させた。ある老人が私に、「牧師はアメリカ人だからだめだ、あなたが来なさい。」と、聖霊の説明をするために毎週訪問するように言われた。その説明の中で彼はどうしても「聖霊」ではなく、「精霊」だとゆずらない。結局は、「聖霊」だと納得したときに、そのご老人はイエスキリストの救いを信じる信仰告白をした。著者が言われるように「...日本人の霊魂観から自由になった時に、聖書の証言する「聖霊」をどれだけしっかりと把握できるかを検討してみる事が必要であろう。」とは、まったくその通りである。第2章の「聖書の聖霊理解」も簡単明瞭に整理されていて、多くの読者の役に立つであろう。

評者として残念に思ったのは3章以降である。本書の当初の目的を著者は途中で忘れられてしまわれたかの様に、3章以降あまりにも神学的になられてしまったようだ。いや、書かれた内容が有意義でないと言うのではない。キリスト教の歴史の中で生み出されていった色々な神学上の定義や、信仰告白が作成されるプロセスの中に聖霊が働いておられたのを知る事はまことに有意義な事である。また礼拝式の中に働かれる聖霊を認識するのも重要な事である。これらのことは、読者にとっても有益である事には間違いない。しかし本書においての当初の目的から焦点が外れてしまったような感じがする。著者は、余りにも神学とその背景に捕らわれ、そちらのディスカッションに深入りし過ぎておられるようである。まことに残念である。しかし、これは著者が礼典主義的、そして信仰告白中心主義的なキリスト教信仰を持っておられるからかも知れないし、案外そこに著者自身が指摘される日本の主流派教会が持つ問題の原因があるのかも知れない。

教会形成における組織神学や歴史的な神学の重要性をおろそかにしたり無視する気持ちは全くないが、「実際、礼拝に出席しても、何だか活気がない。牧師の説教も、難しい聖書の解説か、倫理道徳的勧めか、あるいは牧師の政治的な自己主張か、せいぜい気の利いた文明批評のようなもので、生ける御言葉が語られているのとはほど遠い。礼拝の順序や内容も、旧態依然としている」と、著者が嘆かれるのを読む時に、それは神を礼拝するという本来非常にパーソナルでダイナミックなものを、余りにも儀式化してしまって非パーソナルなものにしてしまったからではないだろうかと思う。礼典儀式が生み出された背景にある信仰の信念を重んじ、生かすにつける事は必要な事である。しかし、

イスラエルが本来「影」であるはずの礼拝の儀式（形式）を「本体」としてしまった信仰生活のゆえに、霊的に死んでしまったのは明らかである。礼典儀式は本来意図された霊が生きていてこそ意義があるものであり、儀式そのものに固執してしまっては意味がない。儀式は「影」であって、「本体」はイエス・キリストである。そういう意味では、本書は礼典儀式の中に働いておられる聖霊と、その中にある神学の重要性を再び認識させるのに役に立つ本である。

私たちが聖書の中で知る聖霊は、正しい神学を確立していくプロセスの背景に立たれる方にとどまらず、あるいは礼拝儀式の中に私達から距離を置くように存在される方にとどまらず、聖書が教える真理を、またイエスの救いの業を私達ひとりひとりに実際の体験として与えてくださる方であると思う。それは著者が言われる「御言葉の説教」の「共用される言葉」を通しての働き以上のリアルでパーソナルなものであり、またダイナミックなものである。使徒パウロは、「私達の信仰は人間の知恵にささえられるのではなく、神の力にささえられる」（コリント人への手紙Ⅰ 2:5）と言っているが、この神の力こそ聖霊によって私達に与えられるものなのである（ルカの福音書 24:49）。まさにこの力なくしては、私達はクリスチャンとして生きていく事が出来ない。この意味でも聖霊は私達の生活に決して欠かせないダイナミックなお方である。教会が誕生したとされるあのペンテコステの日起こった事も、聖霊が降臨されたことにより神学が整えられたというようなものではなく、聖霊が降臨された事によって弟子達に神の力が与えられ、そこから彼らが大胆にキリストの弟子として生きていき、また伝道をしていった、その始まりの事であったと思う。いま、日本の教会に、そして世界の教会に必要なものはまさにこれではなかるうか。聖霊の働きなくして教会は生れないし、成長もしない。

また関川氏が、冒頭で日本の教会において聖霊についての正しい理解の必要性を語る中、いきなり「ペンテコステ派の聖霊理解の過ち」を上げられているのには、従来のペンテコステ派に属していない私でも戸惑ってしまった。その場所では諸教会の聖霊理解の過ちについて語っておられるのではなく、ペンテコステ派だけが誤った理解を持っているような印象を与え、かなり短絡的な発言であると思う。ある意味ではペンテコステ派/カリスマ派の教会において、関川氏が「はじめに」の中で嘆いておられる「日本のプロテスタント主流派教会」に欠けていると言っておられるものを見出せるのが現状ではなかるうか。

一般読者の方々は神学的（組織神学と歴史神学）の部分で多少退屈されるかもしれないが、それを乗り越えて読まれれば得られるところは大きい。しかし、実践的な観点から聖霊が現在どのように教会の中で働いておられ、神の教会を建てておられるかを求めて読まれる方は失望されるであろう。礼典主義の方々や、信仰告白中心主義の方々には是非読んでいただきたい。

竹田亮一

(*、* *) 『Signs』第5号：アンデレ宣教神学院、2001年、260頁、
1500円

* 「Signs (サインズ)」は、アンデレ宣教神学院の万代栄嗣師や藤林イザヤ師らによって1997年12月以降毎年発行されている研究誌です。ペンテコステ・カリスマ派というと、これまではどちらかという証し中心で、学びと言っても自派の枠内にとどまるものがほとんどであったといえますが、精力的に、自分たちのこれまでの歴史や神学や伝統を聖書的に再吟味し神学化の努力をしておられます。私としては、この小論文集(今回は五号)を聖霊論や現代の聖霊運動に関心を持っておられる方々に心からお薦めしたいと思っています。

「100周年にふさわしく画期的！」

* 第5号は、ペンテコステ・カリスマ運動100周年にふさわしく、画期的で有益な内容となっています。評者自身もかつてからこのような文献(日本の聖霊派諸派に関する資料)の必要性を感じておりましたが、日本で宣教を進めておられる聖霊派諸派に関する入門的、百科事典的参考資料集として本誌を使用することもできると思います。とにかく、このような形にまとめられ公にされた意義は非常に大きいのではないのでしょうか。関係者のご労に感謝いたします。

* 全体的に：本誌約260頁の中に、日本の聖霊派に関わる、多様で興味深い内容がよくまとめられています。初めに、万代、藤林両氏と共に、有賀、杉本、手束各氏による座談会「ペンテコステ・カリスマ聖霊運動の100年を鑑みる」、次にペンテコステ諸派(13の教団、教会から)の歴史的紹介、さらにペンテコステ・カリスマ運動に関わる主要な神学的課題についての考察(ペンテコステ派、カリスマ派、第三の波から)そしてペンテコステ・カリスマ運動がこれから求めていくべき実践的あり方の表明、最後に、藤林氏によるペンテコステ派に対する提言(歴史的に分離派的傾向を持っていることの問題や限界を指摘すると共に新しいあり方を探る)

「教えられたこと沢山、お願いも沢山！」

* まず全体的に：「第一部、第二部：座談会について」：せっかく各教派の特徴、相違点、類似点などが本誌において出揃っているの、これらの内容を踏まえた上での各派(代表3人 5人)による座談会、研究会議のようなものがあってもよかったと思われま。* または、万代氏の「解題」において、座談会で話された事柄そのものについての総括(詳細な分析と評価)のようなものを期待しました。この座談会で何が問題となったのか。何が課題なのか(座談会で現れてきたこと、来なかったこと)、またどんなことが共通項として確認出来たのか。そして、本誌13頁にあるような座談会の目的(個性、特徴、しかし主にある一致を理解の面でも進めていく)がどれくらい達成できたと言えるのか、お聞きできればと思いました。これこそが次の一步にふさわしい現実的準備になるのではないのでしょうか。「第一部、第二部」：座談会のため的人選には苦勞されたと思像しますが、話し合いそのものを見る限りにおいては(文面から)やや物足らなさを感じました。友好的でよかったと言えるかもしれませんが、逆に参加者の間

に遠慮があったのではと思ってしまいました。またもっと議論がかみ合うような人選が可能だったかもしれません(たとえば、万代氏と同年代で、同じような問題意識を持っておられる方々を各派からお招きするとか?)。「第三部」:歴史あり小論文あり証しありで、それなりに意義はあると思いますが、出来たら「目指しておられる研究誌」にふさわしく一定レベル以上のものが欲しかった。また読者の学びのためにも、論文ごとに有益な参考(参照)文献などの紹介もお願いしたい。

- * 個別に: * 「第一部:座談会から」:聖書の権威がほとんど確認されず、重要な話題の一つとしても取り扱われていなかったことに評者は少々心配しています。もちろん、このことは話し合いの前提であり、出席された諸氏の信仰の前提であるといわれるかもしれませんが、このことを抜きした(または、このことが強調できないような)「一致」が話し合われているように思われました。「御霊による一致」ということが多用されていましたが、実際にここにどんな理解が想定されているのでしょうか。多様な現実があるにもかかわらず御霊によって次第に(または突然)一致が与えられるということでしょうか。聖書のことがほとんどふれられていませんでしたが、それにもかかわらず一致が与えられるということでしょうか。座談会で、いくつかの重要表現(用語)の理解を整理したり、聖霊体験の相違や類似性を確認したりするだけでなく、聖書の権威とそれに基づくより健全な神学の構築(聖霊論も)聖書に基づく一致への努力がさらに議論され確認される必要があったように思います。これこそが座談会の初めに求められていた「一致」の土台になりうるものではないでしょうか。これがあいまいなままで、本当に一致は可能でしょうか。聖書の権威を考えないで、多様性の中で聖霊による一致が求められるのでしょうか。体験だけならこれからはますます多様化するだけだと思います。聖書はご聖霊のことばであり、ご聖霊はみことばを用いられることを確認していただきたかったと思います。座談会の参加者の方々はいずれも聖書信仰にはっきり立つ先生方であると思いますが、お互いの一致を語る時には、「聖書(の権威)」は持ち出しにくい課題なのではないでしょうか(私が「聖書」という場合、これはある特定の教派教団の神学や体験、伝統に立った「聖書解釈」ということではありません。)。また今後、福音派(狭い意味で)との関わりをどうするのか、ということについても話し合われなかったようですが、この点も21世紀の日本の教会を考える上での最重要な課題の一つであると思われるかどうか。
- * 手束氏「キリスト教第三の波」と「聖霊の第三の波」について(75頁以下):手束氏が言うておられるように、果たして「聖霊の第三の波(以下、第三の波)」は、「キリスト教第三の波(以下、カリスマ運動)」に含まれる「カリスマ運動福音派版」なのではないでしょうか。結果的にお互いに影響しあっているし類似している面もありますが、歴史的にも、神学的にも、実践的にも異なっているところがあると思いますので、この見解には賛成できません(結局は何を基にして考えるかですが。)
- * 菊山和夫氏(88頁から95頁):ゴードン・フィーは、評者の恩師の一人であり、そういう意味で注目しましたが、この小論文での「フィー」の取り扱い

読者に誤解を与えてしまう可能性があると思います。氏の論文の初め（88頁）では、フィーのことを「アッセンブリー教団の...正教師」と紹介しておられるのに、終り（93頁）のところでは、「福音主義者たちの一人」に数えられています。ある意味で両方とも事実なのですが、この点について少し説明があったほうがよかったです（フィーの神学や著書については、今後本会報で取り扱っていきたい）。

- * 歴史の部（88頁以下）：1950年代にカナダのサスカチュワン州（Battleford）で起こった「ラターレイン運動（The Latter Rain Movement）」についての分析、評価が入っていませんでした。この運動はペンテコステ派の歴史において見過ごしに出来ない重大な運動（出来事）の一つであり、現代（特にペンテコステ派）にまで大きな影響を与えているものと思いますので何らかの形でふれていただきたかったと思っています。
- * 大川修平氏の小論文から（177頁以下）：氏の「聖霊のバプテスマ」についての説明に関して（181頁）評者もこの見解に大賛成ですが（この立場について今後本会報で詳述したいと思います。）果たして「インナーバプテスマ」と「アウターバプテスマという」区別が必要でしょうか。たとえば、使徒10章の「バプテスマ」はインナーかアウターか。また4章31節の「聖霊の満たし」はインナーかアウターか、それとも本質的に異なるものでしょうか。*また最後に（184頁）聖書の絶対性の強調と、信条を絶対化することの問題にふれられていますが、これはまことに重要な指摘であると思います。このような視点を、先の「座談会」に取り入れていただきたかったと思います。
- * 尾形守氏の小論文から（191頁以下）：氏によるJEAとNRAの関係についての説明はむしろ偏っていて楽観的過ぎるのではないかと感じました（特に195-196頁）。私としてはむしろ、現在はある種の「棲み分け状態」が出来てしまって危機的状況にあるのではないかと感じています。そういう意味でも、両者間の実質的な交わり形成のために、本会の働きが少しでもお役に立てればと思っています。
- * 藤林イザヤ氏の論文「21世紀のペンテコステ派：分離主義的傾向の修正と新たな展望」について（236頁以下）：本誌の中でも最も教えられることの多かった論文です。
- * 全体的に：聖霊派にとってかなり手厳しい内容、また自戒的分析（たとえば、韓国に対する謝罪についての言及）も含まれているが、全体的に良くまとまっていてポイントもはっきりしている。ややもすると、「リバイバル！再臨！」の掛け声と共にかき消されてしまう「地に住み、誠実を養う（詩篇37：3）」ことの重要性がもう一度見直されていることに注目したい。またそのあたりの理由を、歴史的に、神学的に分かりやすく説明しておられる。ただし、もう少し明らかにしていただきたかったことは、「未来主義的」前千年王国思想（だけ）に問題があるのかということである。これだけが問題の原因なのか。初期のペンテコステ派の終末観に問題、またはアンバランスなところはなかったのか（ディスペンセーションリズムが浸透する前）。確かに、「未来主義的」前千年王国思想そのものが与えた（今も与えている）影響は大きく否定できないと思われる。ただし、経

験的にも神学的にも、その初めから彼岸性に対する過度な強調があったのではないか(この場合、「ディスペンセーションナリズム(神学)」とは、「古典的、または修正ディスペンセーションナリズム」のことで、最近の「プログレッシブ・ディスペンセーションナリズム」のことではありません。以下も同様ですのでご了解下さい。)

- * 解決の道は「未来主義的」前千年王国思想だけを修正または廃棄すればよいとは思えない。その「たが」をはずすだけで、本当に彼岸性に傾斜したあり方が是正されていくのか。また指摘されているようにディスペンセーションナルな神学とその影響から脱することによって此岸性のある生き方を回復することが出来るのか。おそらく、より大きなあるべき終末論的枠組み(彼岸性と此岸性の健全なバランスをもった終末論の再構築)の中で、たとえば、リバイバルとそれを求める祈り、今の世界と新しい世界との関係(連続性と非連続性)、イスラエルの救いとそのための祈り、大患難、(前)千年王国思想、あがないを終末的完成に導かれるご聖霊の働きと御霊に満たされて今を歩むこととの関係、後の雨の理解などについても十分に議論され整理されていく課題も残っているように思われる。
- * 参考文献として、後藤敏夫著の「終末を生きる神の民」(いのちのことは社、1990年、950円、95頁)を挙げたい。ここでは、今日の福音派の中に見られるある種の分離主義的な問題(悲観的な社会倫理観)が指摘されている。とにかく藤林論文を通して、福音派の中にも大なり小なりある分離主義的な問題(未来主義的前千年王国思想に立っていないなくても)について改めて考えることが出来た。また他の参考文献として、Gerald T. Sheppard(当時、Union Theological Seminaryの準教授でThe Church of God in Christの教職でもあった)の“Pentecostals and the Hermeneutics of Dispensationalism: The Anatomy of an Uneasy Relationship (Pneuma: Fall, 1984)”も挙げる事ができる。Sheppardは、ペンテコステ派(アッセンブリー)がディスペンセーションナルな終末観(艱難前携挙)とどのように関わってきたかを文献的に扱うと共に、そこに現れてきた教会論的、解釈学的問題を明らかにしている。

(*、 * *) 「使徒の働き」：入門書の簡単紹介

*以下の三冊は、「使徒の働き」をこれから本格的に学ぼうとする方々にお薦めしたい入門書です。会報「創刊号」でご紹介した Walter W. Liefeld の *Interpreting the Book of Acts* と共にぜひお読みいただきたい。なおこれらの書は、下記のようにそれぞれの特徴をもっており、アプローチも目指すところも異なっていますので、出来れば3冊(4冊)とも利用されると良いかもしれません。

Mark Allen Powell. *What are they Saying about Acts?*, New York: Paulist, 1991 (147pages).

*本書は全部で六章からなっている。第一章「ルカの第二巻の書」では、使徒の働きを理解する上で、まずどうしても考えなければならない三つの論点を取り上げている。それは使徒の働きとルカの福音書との関係、ジャンル、目的である。第二章「使徒の働きの構成」で著者は、使徒の働きの構成に関わる重要な諸要素に着目している。写本、言語とスタイル、構造、資料、スピーチ、著者、執筆時期などである。特に、スピーチや著者問題に関する取り扱いは簡潔であるが有益である。第三章「使徒の働きの神学」、第四章「使徒の働きにおける教会」においては、以下の5つの主要な神学的テーマが扱われている。神、イエスキリスト、聖霊、終末、教会(リーダーシップ、成長と勝利、異邦人に対する働き、教会と国家、教会生活)。第五章「使徒の働きを歴史として読む」において著者は、使徒の働きの歴史的価値について考えている。第六章「使徒の働きを文学として読む」では、使徒の働きの神学的メッセージを明らかにするために役立つレトリカル(Rhetorical)批評、ナラティブ批評を分析している。

*本書の特徴は、著者も述べているように、使徒の働きに関わる様々な課題について現代の専門家たちの見解を一般読者のために整理して紹介するものである。それゆえに、著者は一つ一つの重要な課題やテーマに基づいて、主要な文献を選択分析し、専門家たちの見解をまとめ評価を与えている。著者の簡潔で適切な取り扱いと判断は多くの読者にとって大きな助けとなるだろう。また本書の目的で明らかにされていたように、著者はある特定の見解を読者に押し付けるのではなく、出来る限り多様で幅広い、ただし可能な見解を提示しているといえる。とにかく、使徒の働きに関わる専門家たちの諸見解に近づきたいと思うならば、本書は一般読者にとって最も便利で有益な書のひとつであろう。

H. I. Marshall. *The Acts of the Apostles*, Sheffield, England: Sheffield Academic, 1992 (112pages).

*使徒の働きに関する注解書や他の文献についての簡潔で有益なコメントの後、使徒の働きの解釈に不可欠な課題を取り扱っていく。第一章「ジャンルと構造」では、使徒の働きを読む時にまず何に注目したらいいのかを考える。その構成要素、ジャンル、構造、物語の筋。第二章「執筆事情と目的」では、目的に関する専門家たちの諸見解を取り上げ、分析と評価を与えている(Powellのものよりもっと直接的)。最後に自らの見解を提示する。また彼は、使徒の働きの当時の読者(読

者たち)の状況や特徴を注目すると共に、何よりもルカ書と使徒の働き(の序言)を重視する。著者は、他の可能な見解(二次的な見解として)と共に、使徒の働き(の中心目的)として次のものを提示している。それは、イエスキリストの福音に関して読者たちの理解と信仰を確か(に)にすることである。それゆえに、使徒の働き(にある福音の)前進は、ルカのこの目的に合致しているといえる。第三章「メシアについての教会の証し」では、ルカの神学の内容や特徴が扱われている。その中で、彼は Conzelmann の見解(パルシアの遅延)、初期カトリズム、第三世代の神学などを批判して、自らの見解(福音の証し)を詳述している。「福音の証しこそ、使徒の働き(の)中心的テーマである」第四章「証しする共同体とその問題」では、教会生活に関わるいくつかの神学的側面を、主要な神学的テーマに基づいて説明している。それは、証し、証しの力、証しの範囲、共同体における社会的問題などである。第五章「歴史と神学」では、19世紀からの専門家たちの使徒の働き(の)歴史性に関する諸見解を簡潔に概観、評価している。たとえば、Hengel, Ludemann, Hemer などの見解についてである。そして、Haenchen と Conzelmann の時代は終わり、今は使徒の働き(の)歴史性を認めて行こうとする新しい動きがあると、マーシャルは述べている。また、使徒の働きとパウロの手紙の間にあると見られているいくつかの不一致に関する問題に解決を与えている。第六章「解釈学的問題」では、使徒の働きを現代の読者がどのように読み、どのように適用していったらよいのかについて言及している。そして健全な解釈、適用の必要性を強調している。また使徒の働き(の)特異性のゆえに、事例を挙げながら解釈上最も重要な原則を確認する。第一に、使徒の働きは全体の文脈の中で読まれるべきである。第二に、聖書の他の箇所(に)立って、使徒の働き(にある)特異(な)な教(え)を相対化(し)ては(い)け(な)い。この二つは重要なポイントであるが、著者は詳しくは説明していない(そういう意味では、Liefeld の著書が必要になる)。

* マーシャルは、使徒の働き(の)神学的聖書(的)目的(福音の証し)に堅く立ちつつ本書を進めている。そういう意味で、本書にはある種の「答え」がすでに準備されているし(Liefeld や Powell 以上に)取り扱われている事柄の範囲も絞られているといえる。したがって、マーシャルの書は入門者にも特に読みやすく、また近づきやすいものと言える。また、福音派の代表的な注解者であり神学者のものとして安心して薦めることの出来る入門書である。さらに章ごとに、読者のために文献的情報が載せられており、本書全体の内容も読者のためによく整理されている。以上のような特徴のゆえに、多くの読者にとって有益なものであるといえる。ただし、使徒の働き(を)さらに学ぼうとする者たちにどうしても必要となる使徒の働き(の)「narrativeness(物語性)」についての情報やそれを理解するための助けが不足しているといえるだろう。

Joel B. Green and Michael C. McKeever. *Luke, Acts and New Testament: Historiography*, Grand Rapids, Mich.: Baker, 1994 (148pages).

* 本書は、The Institute for Biblical Research Bibliographies のシリーズの一つである。編者である Tremper Longman, III が言っているように、このシリーズ

の目的は、入門者たちが関心のあるテーマに関して、専門家たちの文献を知るための助けを与えるものである。本書には、500以上の重要な文献(論文も含めて)が含まれており(部分的な重複しているが)いくつかの項目にしたがって分類されている。たとえば、文献表・概観・研究の歴史、ルカ書と使徒の働き注解書、ジャンル・一致・目的、神学、など10章あり、さらに各章は細分類されている。

*確かに、本書はルカ書と使徒の働きを学ぼうとする者たちに大きな助けとなるものである。特に、四つの特徴を挙げることができよう。第一に、最も重要で不可欠な文献がリストアップされている。第二に、載せられている文献に関する簡潔で有益なコメントが付加されている(Powellのものにも最後に有益な紹介があるが)。第三に、500冊以上の文献が、適切に分類され非常に使いやすくなっている。第四に、本書の文献情報は、同タイプの他の文献と比べても、非常に新しいといえる。実際に、1993年までの文献がリストアップされている。

(*) 高木慶太、テモテ・シスク著『今日における奇蹟、いやし、預言』いのちのこ
とば社、1996年、253頁、1800円プラス税

- * 聖霊派に属する兄弟にとってはかなり読み辛い書ですが、ここにも学ぶべきことがあるはずなのであえて選んでみました。高木慶太先生(2001年12月11日、リンパ腺ガンのため召天されました)の遺言の書として教えられたいと思います。
- * 本書全体が六章(日本に押し寄せているさまざまな教えの波、力の伝道、いやし、霊の戦い、預言、まとめ)からなっていて、ペンテコステ・カリスマ派全般についてというよりも(もちろん関わりはある)主に「第三の波」について取り扱っているものです。
- * 本書もまた、ディスペンセーション神学の立場から書かれていますので(もちろん、このことが初めから意識されているかどうかはともかく)、そういう意味では会報(創刊号)ですでに取り上げたジョン・マッカーサーの「混迷の中のキリスト教」と内容的に多くの類似点があると思います。

「耳を傾けるべきことがある!」、しかし「全部賛成というわけではない!」

- * 第一章: ここで第三の波運動に関わる様々な問題が取り扱われるが、「最終的な権威」として聖書が確認されている。何を基にしてこれらの問題を取り扱っていくのか、それが聖書であることは言うまでもない(34頁)。
- * 第三の波の強調の一つに、「一致すること」があるものの、どういう一致を求めているのか更に明らかされる必要があると思われる。「教理的な違いは置いておいて、しるしと不思議の経験を中心に一致しましょう(31頁)」で本当にいいのか。これが果たして「御霊の一致」なのかよく考えたい。

* 第二章「力の伝道」: 異論はいろいろあると思いますが、保守的な立場から「力の伝道」について簡潔にまとめ、これに対する検証もよくなされている。神のことばとしての聖書がどんなに大切か伝わってくると共に、重要な指摘がいくつかなされている。第一に、「十字架以上にするしや不思議に心奪われている次の世代の人たちが語りをはじめると、福音がなくなる恐れがあります。それが最大の懸念です(48頁)」と言われています。日本においてこのような問題はまだ少ないかもしれませんが、北米ですでに起こっていることだと言えるでしょう。北米に住む友人の牧師が、カリスマ運動に関わる牧師たち(その多くは二世代目)の集まりに参加したのですが、聖書の権威が非常に曖昧になっていると語っていました(本書の場合は、第三の波についてであるが)。第二に、伝道において「しるしと不思議」の強調によって、人々の心が福音(の内容)よりも奇跡的なもの、センセーショナルなものに心を奪われてしまう可能性がある(44頁以下)。もしこの指摘が事実であるなら、確かに大きな問題である。イエス様の伝道においても、「しるしと不思議」は大きなウエートを占めていたと思われる(伝道そのものというよりも、少なくとも、救いのための入り口的な働きがあったと言えるだろう)。そういう意味でも、福音宣教(十字架宣教)における「しるしと不思議」の神学的、伝道的位置づけを明確にさせておくことは必要なことである。また、ただ十字架を連呼すればいいのではなく、その内容をしっかりと語る必要がある。何といたっても福音は救いそのも

のを与える力であり、「しるしと不思議」はその代わりをすることは出来ないからである。

- * 「力の伝道」の分析批判において、「今はそのような時代ではない」というディスプレイセーションな考え方が背後に見えてくる(特に、2章の後半)。しかし、問題はそれですべてを言い切ることが出来るかである。奇跡を、イエス様とその弟子たちだけのものとする事ができるのか。また聖書の奇跡を、三つの新しい啓示(の始まり)の時代にだけに限定することが出来るか、である。

* 第三章：いやし(約80頁): 癒し、また癒しの問題が本格的に取り扱われている。本書の中で最も長い章であり、内容的にも教えられるところが多い。すべての点で賛成する必要は無いが、ここで指摘されていることのすべてをだれも否定できないだろう。少なくとも、そのいくつかについて真摯に受け止め考えてみることは良いことだと思う。著者たちも現代における神様の奇跡的な癒しの可能性を否定しているわけではない。癒しの定義、癒しの分類、分析、どうして癒しが起こるのか、イエスキリストの癒しについてのまとめ、実際の癒しの報告、専門家たちの意見、ヒーラーの証言などをよくまとめ論じている。指摘されていることの中で、特に注目できることをあげたい。第一に、「奇蹟ばかり強調しすぎる」ことから起こりうる弊害として、自然的なことを軽視したり、それがあたかも神様のみ業(恵みの一つ)ではないかのように思ってしまう問題が取り上げられている。どうしても、この二つを対立的に考えてしまうのである。しかし聖書にはそのような対立概念はない(102頁以下)。第二に、「キリストのいやし」についての6つのポイント(114頁以下)も、現代のいやしと比較しながら良くまとめられている。第三に、いやしの体験について、長期的な観察と確認の必要もうなずける(120頁以下)。たとえば、フィリップ・ヤンシーの著書の一つ、「神に失望した時」の中にもその例が示されている(37頁以降)。最後に、「病気の時にどう祈ればよいか(170頁以下)」は、まさに高木先生ご自身の祈りだったと思われるし、また私たちの祈りでもあるといえる。

- * 143頁以下に、聖書にある癒しの頻度が時代別に集計され(リチャード・メイヒューからの引用)、いつの時代にも同じように奇跡(癒し)があるわけではない旨が記されている。しかしここで重要なことは、聖書にあること(もちろん頻度も)が、その時の時代状況をそのまま、公平に詳細に、表しているとは限らないという事である。聖書は、聖書各書の著者がそれぞれの神学的意図に従って資料を収集、使用して纏め上げたものである。したがって、神様の奇跡的なみ業が実際にいろいろ起こっていても、その神学的意図の故にそれらが全く記されない場合もあるのである。ここで特に問題だと思われるのは、「パウロから徐々に取り去られた奇跡の力(144頁以下)」として使徒の働き(30年間)には癒しの実例が時々見られるのに、パウロ書簡(40年間)には全く無いことが指摘されていることである。この点はおそらく、ノーマン・ガイスラーなどの主張に沿った見解だと思われるが、忘れてならないことは、パウロ書簡は「使徒の働き」ではないという事である。ジャンルも、神学的意図も同じではない。両者を平面的に並べて比較し、パウロの後期にはすでに奇跡の力が彼から薄れて行ったことを論証することは難しい。これら

のことも、教理的な（ディスペンセーショナルな）結論がすでにあってこれに無理やり当てはめようとしているくらいが見られる。

* 第四章：霊の戦い： 前半において「霊の戦い」と言われるものについての説明（ただし、第三の波に属する（関わる）すべての人がこのように理解し実践しているとは思えないが）と、後半に、それに対する聖書的検証が行なわれている。確かに、引用されている聖書箇所には、ワグナーが考えているような意味での「霊の戦い」や「これに信徒が参与することを勧める」聖書箇所は無いと思われる。ただし別の意味で、聖書に「霊の戦い」があることまでを否定することは出来ないだろう。評者の提案としては、第一に、聖書が語っている「霊の戦い」とは何かを明らかにすること。第二に、聖書が語っていない「霊の戦い」とはどんなものを明らかにすること。そして第三に、聖書は明確に語っていないが、体験的にどのようなこと（まで）が言えそうかを提案することである。

* 「霊の戦いの定義また説明」に関して、確かにワグナーの理解はそれでよいと思われるが、第三の波（また、カリスマ・ミックス）の全体がこのように考えているとすることは行き過ぎになるだろう（176 - 178頁）。

* 第五章：預言： 第三の波における預言の理解の分類は、テモテ・シスクの論文「An Introduction and Evaluation of the third Wave Movement for Baptist International Missions Inc.」にあるものでの確で助けになるもので、現代においてわたしたちが直面するかもしれない「預言」も、この二つのどちらかであるといつてよいと思われる。著者たちは、この二つの立場について分析をし、どちらの立場にもある問題点を明らかにしている。

* 第三の波（カリスマ・ミックス）においても、預言は最重要課題の一つであるが、残念ながら取り扱いとしては簡潔である。個人預言の問題、預言者と預言の賜物との関係、預言と内的導き（内的うながし）との関係、旧約の預言者と新約の預言者との比較など取り上げていただきたい課題が多く残っている。

* まとめ： 著者たちは、「カリスマ・ミックス」の人たちのもつ特徴として、聖書に書かれていないことを強調する傾向があるので、その中で、特にセンセーショナルなものに気をつけるように教えている。これらの指摘は適切で重要であると思われる。また最後に、カリスマ・ミックスの運動が持つ魅力、そして福音派が学ぶべき6つの点が挙げられている（リバイバルへの渴望、神の力、聖霊、生き生きとした賛美、祈り、賜物に応じた信徒の動員）。聖霊派も、本書から学ぶべき点を6つ挙げるとするとどんなことになるか。高木慶太先生の遺言として共に教えられたいと思います。

W&S「会報」・創刊号の目次

- 1) * 「創刊の言葉」に代えて：「忘れられない二つの出来事」 ... 2頁～
 冒頭の星印で、各小論文や文献紹介の対象が示されています。
 *一般向き、 **牧師、伝道者向き
- 2) ** 釈義的アプローチ：「超自然的賜物」は終わったのか？ ... 5頁～
- 3) * 「聖霊論」の歴史的概観（その1）：宗教改革まで ... 11頁～
- 4) ** 歴史に見る預言現象と預言運動（その1）：第一世紀 ... 16頁～
- 5) 甘辛文献紹介（その1）
- * 「21世紀への対話：福音派とペンテコステ・カリスマ派の明日」
 内田和彦、万代栄嗣著 竹田亮一 ... 20頁～
 - * 「聖霊の？がわかる本」万代栄嗣著 渡辺睦夫 ... 23頁～
 - ** 「混迷の中のキリスト教（櫻井園郎 訳）：
Charismatic Chaos」John MacArthur 著 渡辺睦夫 ... 24頁～
 - * 「全うされて一つとなる」山本杉広著 渡辺睦夫 ... 28頁～
 - ** 「使徒の働き解釈学（渡辺睦夫 訳）：
Interpreting the Book of Acts」Walter L. Liefeld 著 渡辺睦夫 ... 29頁～

ワードン・スピリットの会 (Word & Spirit [略: W&S]) の説明とご案内

初めに:

1995年にカナダから帰国しましたが、その前後から、神様の特別な恵みであったこれまでの学びと経験(主に、カナダでの学びと経験)を、日本の同労者の皆さんにお分かちする必要があるのではないかと思うようになりました。また日本におきましては、聖霊(論)に関する様々な問題が、神学的にも、実際的にも、巻き起こっておりまして、少しでも役立てていただければと考えました。

ただ、この会の活動内容や方針などを実際に検討し始めると、多忙な牧会と共に、この会を果たして運営管理していくことが出来るだろうかという不安ばかりが出てきて、しばらくの間、公にすることが出来ませんでした(個人的に進めていましたが)。しかし、この会についてのアイデア、ヴィジョンを聞いた友人知人たちが多くの励ましやアドバイスを与えて下さり、その中で少しずつ会の準備を進めることが出来ました。*Interpreting the Book of Acts*の訳書出版を機に、ワードン・スピリットの会も、同時に公にすることにしました(2001年9月発足)。

この会の出発にあたり、まず何よりも、カナダ時代からの友人であり、この会の良き協力者でもある竹田亮一牧師(Blaine Christian Fellowship: カリスマ派)に心からの感謝を表したいと思います。確かに、竹田牧師との良き交わりを通して、交わりの故に、この会が生れたと言ってよいと思います。聖霊論の学びをするためにリジェントカレッジに入学した私に、もっと広い意味で、又、実際的にも、御霊による交わり、ペンテコステ・カリスマ派教会、北米における聖霊運動などを紹介して下さいと言えます。

会の主な目的:

目的は、会の方針にありますように、何よりも、より詳細な聖書的神学的側面から「聖霊(論)」に関する情報、学びを提供することと、今の日本の状況として福音派(狭い意味で)と聖霊派との間に存在する課題や問題を、聖書的、神学的に取り扱うことによって相互的交わりの備えにしたいということです。もちろん、この目的のために、より厳密な釈義や解釈学、また、同じ主にあって信頼し合う交わりに基づく健全でオープンな議論も必要があると考えます。

渡辺 睦夫

ワードン・スピリットの会 (Word & Spirit [略: W&S]) の方針: 2002: 1

- 1) 会の目的:

日本において、これまで不足していたと思われるより詳細な聖書の神学的側面からの「聖霊(論)」に関する情報、学びを提供していきたい。

また、日本の現状として、福音派(狭い意味で)と聖霊派との間に存在する課題や問題を聖書的、神学的に取り扱い相互の交わりの備えとしたい。
- 2) 会の強調点:

特に、健全な釈義や解釈を目指しながら、日本における「聖霊論」の刷新を求めていきたい。

一方で、体験に基づくだけの聖霊理解を補正しながら、他方で、これまでの聖霊論では取り扱われてこなかった分野にも新たな目を向けていきたい。

会の学びの枠組みとして、次の二つを強調したい。

 - * 聖書の健全な理解と聖霊の自由な働きは分離できない。
 - * 健全な三位一体的理解を求めつつ、聖霊(論)の学びを進めていきたい。
- 3) 会の対象:

会の対象は、信徒や牧師である。

W&Sから発刊される「会報」には、星印でその文書の対象を明記したい。

(*一般信徒向き **牧師、伝道者向き)
- 4) 会の運営:

渡辺が主宰者として、竹田(下記参照のこと)が協力者として会を運営管理(会報などの作成)する。ただし、他からの投稿も審査の上で受け入れることも出来る。近い将来、委員会を設置拡大し、W&Sの会を運営管理することも考えている。この場合の委員会のメンバー資格は以下のようなものである。

 - * この会の目的や強調点を積極的に理解して下さる方
 - * 互いに理解の相違があっても、徹底的に話し合い、学び合い、相違を受け入れ合って行ける協調的な方。
 - * また、聖書のみことばの健全な理解を何よりも求め大切にする方。
 - * 聖書の釈義や解釈を重視するので、そのための知識や経験を持っておられる方。
 - * イエスキリストとその教会に仕える点で心から献身しておられる方。
 - * 多くの場合、Eメールなどで連絡を取り合うことになるので、これを使っておられる方。
 - * この会の目的に重荷をもってある程度時間を捧げていただける方。

この会は会費と献金によって運営され、毎回の「会報」を通して報告をする。年会費は「1500円」であり、経済的に許される範囲で活動を継続していきたい。

 - * 入会金300円、会報(創刊号: 200円、第二号250円)。なお会報は郵送の場合、各号150円?余分にかかりますが、メールの場合送料は要りません。
 - * 一括支払いの場合、一年分1500円になります(ただし、メールで送付する場

合は、入会金300円、創刊号200円、第二号250円、第三号250円?で、
1000円)

5) 会の活動内容:

年に3-4回の予定で、会員に「会報」を送付したい。また、Eメールなどの活用も考える。

近い将来、会のホームページを作成し、互いの交流を図る願いもある。

その他、会の目的にふさわしい良書の翻訳、特別研修会なども開きたい。

*まずは「会報」を作り読んでいただくことから始めるが、読者(会員)の要望などから、この会の活動をさらに深め広げていく可能性もある。

6) 会の活動継続期間:

毎年9月から翌年8月末を一年の活動期間と考える。

毎年6月に、活動の継続(更に一年継続するかどうか)について検討したい。

7) 「会報」について:

「聖霊(論)」に関わる様々な小論文などを掲載する。

聖霊に関する証しを掲載する。

会員内の様々な意見、質問などを掲載したい。

良書(又、特別研修会)の紹介、書評、感想などを掲載する。

なお、「会報」に掲載した小論文などに関しては、更なる研究の為に執筆者に「図書券」などを贈りたい。

8) 会の信仰告白:

* 会の信仰告白として、The Statement of Faith of the World Evangelical Fellowship(1951)を採用させていただいている(原文のまま)

* We believe in

the Holy Scripture as originally given by God, divinely inspired, infallible, entirely trustworthy; and the supreme authority in all matters of faith and conduct...

One God, eternally existent in three persons, Father, Son, and Holy Spirit...

Our Lord Jesus Christ, God manifest in the flesh, His virgin birth, His sinless human life, His divine miracles, His vicarious and atoning death, His bodily resurrection, His ascension, His mediatorial work, and His personal return in power and glory...

The Salvation of lost and sinful man through the shed blood of the Lord Jesus Christ by faith apart from works, and regeneration by the Holy Spirit...

The Holy Spirit, by whose indwelling the believer is enabled to live a holy life, to witness and work for the Lord Jesus Christ...

The Unity of the Spirit of all true believers, the Church, the Body of Christ...

The Resurrection of both the saved and the lost; they that are saved unto the resurrection of life, they that are lost unto the resurrection of damnation.

* なお、以上の告白は、Rex A. Koivisto (*One Lord, One Faith: A Theology for*

Cross-Denominational Renewal [Wheaton: Victor Books/SP Publications, 1993], 300-301)が、David M. Howard の *The Dream that Would Not Die: The Birth and Growth of the World Evangelical Fellowship 1846-1986* ([Exeter, Great Britain: Paternoster], 31)から引用したものである。

9) その他:

郵便振替口座番号:「ワードン・スピリットの会」00880 0 81280
主宰者と会の協力者は次のとおりである。

*主宰者:渡辺睦夫:岩倉キリスト教会牧師(福音派:団体「同盟福音キリスト教会」を通してJEAに加盟)

*協力者:竹田亮一:Blaine Community Church 牧師(アメリカ・カリスマ派)

連絡先:482 0041 愛知県岩倉市東町東市場屋敷252

岩倉キリスト教会:渡辺 睦夫 電話・ファックス:0587 66 0392

Eメール:wordansp@nifty.com

主宰者の紹介：

渡辺 睦夫：岐阜県揖斐川町出身、1952年生まれ。17才の時に揖斐川町七間町キリスト教会（現在、日本福音キリスト教会連合：揖斐キリスト教会）で受洗する。

現在、愛知県岩倉市にある岩倉キリスト教会（同盟福音キリスト教会）牧師である。また、東海聖書神学塾で新約釈義、ギリシャ語中級、聖霊論のクラスを担当している。家族には妻と四人の子供（うち一人は召天）がいる。

東洋大学、聖書神学舎、リジェント・カレッジ（神学修士）、トリニティー国際大学（牧会学博士）で学ぶと共に、1977年より揖斐・北方キリスト教会（岐阜県）、1989年より Megumi Baptist Church（カナダ：バンクーバー）で牧師として奉仕し、1995年に岩倉キリスト教会の牧会を始めている。「ワーダン・スピリットの会」主宰。

リジェント・カレッジでは、J.I.Packer 博士の下で聖霊論などについて学び（卒論は、現代の預言運動について）、トリニティー大学では教会刷新論などの学びと共に、日本の JEA と NRA の今後のあり方に関する論文（*Interpreting the Book of Acts* の翻訳と合わせて）を書いた。

協力者の紹介：

竹田 亮一：福岡県福岡市出身、1947年生まれ。16才の時に鳥飼バプテスト教会（バプテスト連盟）で受洗する。

現在、米国ワシントン州ブレイン市にある WRCF（ホワイトロック・クリスチャンフェローシップ）の姉妹教会 Blaine Christian Fellowship の牧師で、ブリテイッシュコロンビア州ホワイトロック市に妻と息子と娘の家族4人で住んでいる。

福岡大学を卒業後、東京にて通商産業省に勤める。バプテスト教会に所属しながら、喫茶店伝道などの福音伝道活動への参加や宣教師達の影響を受け、カリスマ派信仰体験をする。1974年 - 1975年、牧師養成プログラムに参加（カナダのバンクーバー）。1975年 - 1977年、名古屋市や神奈川県海老名市の教会で副牧師として奉仕。1977年、カナダでは初めての日系人カリスマ派教会を牧会するためにカナダ（トロント）に赴任。その後、カナダ人教会の牧師の一員となる。1985年、バンクーバー市近郊のホワイトロック市に転居、White Rock Christian Fellowship の協力牧師として、主に教育と海外宣教を担当した。1990年、リジェント・カレッジを卒業（M.Div.）。

福音派的な神学とカリスマ派的な信仰経験を両立させながら、「キリストとキリストの十字架」を宣べ伝える事を使命とした牧会生活をしつつ、福音派とカリスマ派の間に意義ある対話が生まれ、両者間に一致が生れる事を願っている。